看護職部門

# 白いカーテン

【小野寺（おのでら） 真理（まり）・岩手県】

第3回 忘れられない看護エピソード 看護職部門 最優秀賞

24年前の話だが、小児科病棟のナースステーションの窓に掛けられている白いカーテン、その隙間に新人看護師の私は一喜一憂していた。左側が少し閉められている時は、重症の患児がいる。廊下から心電図モニターが見えないように隠されるのだ。右側が少し閉められている時は、年長の先輩が夜勤をしている。カウンターの右端に腰かけ、ちょっと休憩するためだ。半分だけ閉められている日は、食いしん坊の先輩が夜勤をしている。死角を作りカップラーメンを作るからだ。しかも、ミルク用ポットのお湯を使っていた。「内緒だよ」と言って、ポットを押す先輩の手がむちむちしていた。

あの日、日勤だった私は憂鬱（ゆううつ）な気持ちで出勤した。予感があたった。左側のカーテンが閉められていた。「えりちゃんだ」とつい口走り、モニターの前に駆け付けた。隣の個室から「キャー」と叫び声が聞こえ、同時に心電図の波形が１本の線になった。「えりー、えりー」とママの絶叫が響き続けた。

その時、背後で「ザーッ」と強い音がした。振り向くと、師長がカーテンを一気に閉めていた。そして、「5分だけ、泣きましょう」とすでに泣きながら言った。身長180センチ以上もある大男の先生が、大きな手で顔を覆って肩を震わせていた。師長は、胸ポケットに綺麗に畳んでいたピンクのハンカチを取り出し、涙を拭いていた。ハンカチがない先輩たちは、ぽろぽろ流れる涙を自分の指で拭っていた。5分たったのか、もっと長かったような気もしたが、今度は静かに「サーッ」とカーテンが開けられた。

途端に、いつものきびきびとした申し送りが始まった、何事もなかったように。まだうるうるしていた私の肩に、「これがプロというものなんだよ」とむちむちした先輩の手が置かれた。